

ファイールド風

(現場)からの

宮田守男

9月、夏と秋の境目とした季節別名「長月」とも呼ばれている。長月の由来は、夜が長い「夜長月」や秋雨が降る「長雨月」が略され

たとの説が有力だ。月の最終日を「月」と呼ぶ、中村草田男さんは「八月尽の赤い夕日と白い月」と詠み、朱夏が沈み、白秋が顔を出し新涼に安らぎを覚える半面、夏の別れに一抔の寂しさを感じる季節だ。

行っていた地域文化の継承が、従前の考え方では無理だと考えるべきなのだろうか。稀に見る短期間で開発された新型コロナワクチン、異物混入や抗体持続期間の問題点報道が気になってしまふ。

もちろん、ワクチンの特許を取得しなかつた。こんなインタビューが残っている。「特許は誰が持つ事になるのですか」「それはみなさんのものだ。だって太陽に特許はないでしょう」と。

国産ワクチン開発の情報を知りたい。日本が先頭になって特許料を求めない情報が世界に発信できれば、この危機的な状況に、日本を注目してもらおう事で、一度は訪れたい国になるのではないのだろうか。

ワクチン

国産ワクチンには、特許料の国際貢献対応を強く望みたい

雨のためか畦の草の繁殖が気になってしまふ。コメ離れの傾向も続き食料需給率も37%の過去最低と農林水産省が2020年度の数字を発表した。厳しい農業事業にこれまでと異なる着眼点を求めるべきなのだろう。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)



今年の草丈の高いススキの穂は、列車の運行を情緒的に醸し出す

しかしコロナ感染拡大の異常事態は終息の兆しさえ見えない。9月に楽しみにしていた行事が軒並み中止に。「運動会」や「敬老会」への参加機会を失ったと残念がる声が聞こえてくる。各地で行われる「祭り」も盛大に執り行われる事は無いのだろうが、伝統的に

開発で印象に残った東京新聞の筆洗さんのコラム。有史以来、人類を苦しめ続けてきた感染症のポリオ(小児まひ)に対して、有効なワクチンが承認されたのが1955年4月。開発者は米国の医学者ソナス・

また経口タイプの生ワクチンを開発したアルバート・セービンも特許を取得しなかつた。特許を得れば、莫大な使用料が見込まれたが、2人とも財よりワクチンが世界に広がる事を望んだのだと。

水田の稲穂が色づき始めた。だが長野県病害虫防除所は、斑点米カメムシ類の発生が平年より多く、水稲への被害が拡大する恐れがあるとして注意報を発令中だ。8月前半の長